

## 逆行

日照り続きの夏だった  
全ての草木は石ころとなり果てた  
地面を埃が這ってゆく  
それでもひび割れは埋まらずじまい  
何処までも、目を凝らしても  
ひび割れの網の目だった

都会の詩神<sup>ミューズ</sup>はいつでもそっけなく  
喉が渴きっぱなし俺だから  
こんなに遠く逃げては来たが  
どうやらここでは俺の肺さえ  
すっかりひび割れるだろ  
口からは塵をばかり吐くだろ

アパートの部屋には隣りがあったが  
ここでは隣りの音も聞こえない  
ずい分と広い密室です  
誰が言ったか、都会を砂漠と  
きっとよほどの果報者  
きっとよほどの楽道家

前見て歩けばよかったと  
今では骨にも嘆願したいが  
ここでは骨さえ砂と散る

指で地面に詩<sup>うた</sup>を書いても  
すっかり風が消してくれ  
すっかり独りにしてくれる

すっかり独りに全てが要るとは  
ちっともちっとも知らなんだ  
今では爪噛むことさえも  
すっかり俺の楽しみだとは  
ちっともちっとも知らないんだ  
とにかく進むほかはあるまいよ

(1982.3.29)